

お詫ひ
今回の発行が大変遅くなりましたと、お詫ひ申し上げます。



お知らせ
これまで使用していたソフト（パブリッシャー）のサポート終了に伴い、
今後は、ワードを使って寺報を作成いたします。

「自然」を「しぜん」と読むか、「じねん」と読むかで、意味が異なります。しかし、現代では、「しぜん」としか読まなくなっています。そして、「自然」(じねん)と言う意味が伝わりにくく、また理解もされていないのかも知れません。私自身も混合してところもあるようです。

AI に「死は自然(しぜん)なこと」で尋ねると、「生物としての人間が、地球の生態系や物理的な法則(老い、肉体の崩壊)に従うのは当然である」という客観的・科学的なニュアンスになる。

「死は自然(じねん)なこと」で尋ねると、人間が自分の意志(計らい)で生き死にをコントロールしようとするのを手放し、大いなる命の流れに身を任せ、あるがままに還っていくという精神的で深い受容のニュアンスを帯びる。と答えてくれました。

(裏面に続く)

信(※しん)は願(がん)より生(しょう)ずれば

※われら衆生の信は弥陀の願より起こるなり

念仏(ねんぶつ)成仏(じょうぶつ)自然(じねん)なり

自然(じねん)はすなはち報土(ほうど)なり

証(しょう)大涅槃(だいねはん)うたがはず

(『高僧和讃』 善導讃)

『親鸞の人生観』 教行信証真仏弟子章

金子大榮 法蔵館 1966年初版

二五 仏教の真宗

〈本文〉

禅宗の智覚、念仏の行者をほめていはく、まれなるかな、仏力難思なれば古今もいまだあらず、と。律宗の元照のいはく、嗚呼、教観にあきらかなること、たれか智者にしかんや。おほりにのぞんで『観経』を挙し浄土を讃じてながくゆきんき。法界に達せること、たれか杜順にしかんや。四衆をすすめ仏陀を念じて勝相を感じてにしにゆきき。禅にまじはり性をみること、たれか高玉・智覚にしかんや。みな社をむすび仏を念じてともに上品にのぼりき。業儒才ある、たれか劉・雷・柳子厚・白樂天にしかんや。しかるにみなふでをとりまことを書してかの土にむまれんと願じき。已上

〈口語訳〉

禅宗の智覚は、念仏の行者を讃めていう。奇なるかな仏力の不可思議なることは古今にまだ曾てないことである。律宗の元照師はいう。ああ教観に明らかなることは、たれか智者に及ぶものがあるろうか。その人も臨終には『観経』をあげ浄土を讃えて、この世を去られた。法界に達せることは、たれか杜順に及ぶものがあるろうか。その人も僧俗を勧めて仏を念じ瑞相を感じて西に逝かれた。参禅して見性すること、たれか高玉・智覚に及ぶものがあるろうか。その人々も社を結び仏を念じて往生せられた。儒家の才あるものとしては、たれか劉程之・雷次宗・柳子厚・白樂天に及ぶものがあるろうか。その人々も皆な筆を執り、誠を書して彼の土に生れようと願われた。

一

念仏して浄土を願うことは、仏法の真宗である。したがって仏教の諸宗において、それぞれの禅を行ない道を修めても、その体となるものは念仏である。これすなわち「行善の義はもと帰依にあり」ということであり、帰依なき行善は「彩色に膠(にかわ)なきが如し」と説かれしゆえんである。しかれば善き言行も、念仏のところに摂め取られてのみ、その徳を成すものであろう。そうでないと、行善は心の誇りとなって身についたものとはならぬのである。

その行善とは道德にかぎるものではない。道理を知る智慧においてもおなじことである。いかなる思想も念仏に受容せられなければ、真実とはいえない。言い換えれば、ただ念仏に受容せられる思想のみが真実である。これすなわち念仏と

は、自己をたのみず、ひとえに仏力に帰依するものであるからである。したがって念仏の行者にあられるものは仏力そのものにほかならぬのである。

この意義をしれる智覚禅師は、念仏の行者にあたえられる功德利益は古今に稀れなるものであるが、それは仏力の不可思議によるものと讃嘆せるのであった。それは、いかなる行善の功德も念仏の功德に及ぶものがないということであろう。それを古今未曾有と言い表された。その古今未曾有とは、すなわち古今を超越していることである。したがって思想と行善とは時代によりて変異があっても、念仏の功德に推移はないのである。しかれば仏法の体である念仏は、すなわち仏教の伝統の体となるものであらねばならない。ここに念仏して浄土を願うことは、仏教の一宗派

の法ではなく、全仏教の真宗であることが思い知られねばならぬのであろう。これすなわち念仏成仏是真宗と説かれてきたゆえんである。

その事実、智慧の念仏により、信心の智慧によりて見開かれたものである。しかしその智慧の誤りなきことは、また諸宗の高僧の言行によりて証明せられる。その心から親鸞は、さきの「行巻」において広く諸宗の高僧の念仏讃嘆の文を挙げ、いままた「信巻」において手短かに道念ある人びとの願生心を述べるのである。

二

それらの人びとのことは、すべて律宗の元照師の『楽邦文類』によるものである。しかしてその『楽邦文類』には多くの高僧の浄土へと願われた文章が編集されているのであるが、いまここに挙げられたものは、とくに有名なる人びとについて、道に二つはないことを語るものである。

その第一に挙げられたものは、時の帝王から智者大師の号を賜われる、天台宗の祖師、智顗である。この人は広大な構想の下に全仏経を分析し総合してその教相を明らかにせられた。しかしてその上に心を止め、諸法(ものみな)の実相を観る仏法を行修せるのである。そこに「ああ教観に明らかなること、たれか智者にしかんや」といわれるゆえんがある。それだけ智者の天台宗は、中国仏教を代表するものであった。しかしてそれが日本に伝わりて比叡山の学問の基本ともなったのである。源信の『往生要集』も見方によりては、その止観を伝えたものといえよう。しかるにその大思想家であった智者大師も、臨終には人びとに無量寿仏の名と、『観無量寿経』の題目とを称えしめて、四十八願莊嚴浄土、華池宝樹易往無人と誦し長逝せられたということである。

ここでは、その教観を語る必要もなくまた説き尽くし得ることでもない。されどその一旦を知ること無用ではないであろう。その教は頓・漸・秘密・不定の4つに分類せられたものである。經典のうちには、頓(ただち)に第一義諦を説かれたものがある。それは優れた器に対して直観せしめられたものである。禅のごときはその頓教(とんきょう)というべきものであろう。これに対して卑近な

る思想から、漸次に高遠なる道理へと導くものは漸教(ぜんきょう)である。しかるに仏教には、この頓漸の二方式のほかには秘密と不定なるものがある。その秘密は教説を暗示に止めて、言外の理を悟らしめようとするものである。またその教説を聞く者の器によりて、いかようにも了解せられるものは不定教といってよいものであろう。この智顗の四教説は、今日においても、經典を学ぶものの指針となるものではないであろうか。

しかし四教を分つことは、教そのものに四種ありということではない。教の真実、四教の方式を超えてあるものである。その教の真実において三諦円融の観は成立する。三諦とは諸法の実相は空であり仮であり中であるということである。しかしてその空・仮・中というも別なものではない。即空・即仮・即中と円融しているのである。畢竟それは実相は不可思議であるということであろう。不可思議なるものは知識で把握することはできない。空である。不可思議なるものは現にそこにあるものである。それは仮というの外ないであろう。現在には仮在である。だからその在は、有でもなく無でもない。また有といっても無といってもよいものであろう。それが中である。人もしこの三諦の妙理に達すれば何ものにも繫縛せられることなく無碍の一道を行くことができるであろう。

親鸞もこの教・観を学べるのであった。それが浄土教に帰することになってから、その教を『大無量寿経』に見出し、その観念は転じて称名念仏となったのである。それだけ天台の教・観は思い出の深いものであったのであろう。親鸞の用語に、円融・円満等のことばの多いことも、これによることではないであろうか。

三

次に挙げられたものは、華嚴宗の第一祖といわれている杜順である。この人の『法界観門』はあの広大な『華嚴経』の原理を、簡潔に四法界を説くものと見開いたものである。法界とは我らの身心に感知されてあるかぎりの天地万象であり人事万端である。それが事法界・理法界・理事無碍法界・事々無碍法界と四重に観られる。事法界とはそれぞれの差別相をもってみられる万

物である。理法界とはその万象を通じて見られる平等一如なるものである。しかしてその差別と平等とは表裏となっていてところに事理無碍というものがある。その事理無碍の道理は事々物々の上に現成する。そこに事々の実相がある。したがって、この法界の道理に達すれば、永遠も現在にあり、宇宙も己身に内在することが感知せられるであろう。一の内に一切は具わり一切の内に一が見出される。それが具体的現実である。

しかれば分限の生活ということも、この事々無碍の道理の上に成立するものに他ならぬであろう。人それぞれの行為が、そのまま自利・利他を成就するものである。世界に貢献するものは政治や学識にかぎるものではない。田を耕すものも、市に商うものも、職場ではたらくものも、そのままにして世のため人のためになっているのである。それが「普賢の行」といわれているものである。普賢とはまた遍吉ともいわれている。遍吉とは四方八方が、吉祥(めでたい)ということである。まことに人おのおのが、その行務を尽くすことによって、自利・利他が満足せられるということは、これに越したる遍吉(めでたさ)はないといわねばならない。

その華嚴宗の第一祖である杜順も四衆(出家と在家との男・女)に念仏をすすめられた。しかし臨終には奇瑞を感じて西方浄土へと往生せられたのである。

四

第三に挙げられたものは、禅家の高玉・智覚の二師である。二師は同志と結社し「上品の往生」を遂げられた。その上品の往生とは『観経』に説いてある九品の往生人のうちの優れたるもので、大乘經典を読み、第一義の道理に通達せるものの感得するところである。それほどまでに二師は学徳の高い人であった。

智覚には『万善同帰集』という著作がある。それには参禅と現生浄土との帰一が論ぜられている。思うに禅の立場からいえば、阿弥陀というも心の内にあり、浄土というも身に感ぜられるものの外にはない。しかれば、阿弥陀仏は西方の浄土にありて、念仏の行者は、来生にそこに往生する

ということとは、まったく相反するもののようである。これによりて禅の立場にあるものは、浄土の教を方便と思想せるのであった。されど方便とは実践の方法ということであれば、かえって禅の道理に省察せねばならぬものがあるのであろう。

これによりて思うに、阿弥陀は心の内にありといっても、胸裏に求められるものではない。心の深みにある靈性は、はるかに意識を超えて生死の帰依となるものである。また浄土は身に感ぜられるものの外にはないといっても、われらの現実感知しているものは煩惱業苦の外ないのであるから、浄土は現世を超えたる悲願にありて、来生の悟に期待されるものであらねばならない。そこには内の内なるものは、外の外なるものとして畏敬せられ、来生にと期待するものこそ純粹なる内部感情であるといわねばならぬものがあるのである。この道理は、後代における中国の学僧によりて伝承せられた。こうして、実践仏教として興起せる禅と念仏とが、合流せられることは、まことに意味ぶかいことである。

五

最後に挙げられたものは、儒者として浄土を願える代表者としての、劉程之・雷次宗・柳子厚・白楽天の四氏である。そのうち、劉・雷の二人は廬山の慧遠によりて結ばれた白蓮社に加わり、123人の同志のなかでも、十八賢として推称された人びとに属するものであった。とくに白蓮社の誓文は劉氏によりて書かれたものである。柳子厚は韓退之とならび称せられた文章の士であり、白楽天は大衆詩人として周知せられている。この両氏の浄土を願生せられたことは、『樂邦文類』に集められている23の文章によりて知ることができる。しかし儒者にして仏法を学ぶ、一家の見を立てたるものは、この四氏に止まらぬのであろう。ここではとくに浄土を願生せるものとして、その代表者を挙げられたものである。

しかれば出世の解脱を求める仏教の諸宗に限らず、世間道徳を説く儒教の思想も、その究極の帰依となるものは、本願を信じ念仏することである。真の仏子はこの道理を深く信じておらねばならない。それが大信海の心であるからである。

「死ぬ苦しみからの解放と人間の成長 -スピリチュアルケア-

「仏教文化研究所主催シンポジウム」より

シンポジスト

前埼玉医科大学教授 渡辺 孝子
飛騨千光寺住職 大下 大圓
龍谷大学教授 鍋島 直樹
武蔵野大学教授 種村 健二郎

●大下大圓氏(飛騨千光寺住職)

「がんばるのも悪くない～縁生の力」 つづき

弘法大師空海は、六大縁起説ということで地水火風空とそれに識を入れて、意識というものが様々な物質やそういうものと調和しながら最終的には宇宙的な命に繋がっていく、そういう世界のことを一切法平等無為心と表現したわけです。仏教はよく、自分の心を見つめていくことだと言いますよね、己事究明(こじきゅうめい)という言い方をします。自分を見つめていくというのは、自分だけの世界に留まることではないのですね。自分というもののの中から、宇宙を見ていくと言うこと。科学が、本質を外から客観的に見ていくという作業であるとするならば、仏教は、あくまでも自分の心に根ざして、その心から出発して、その心を拡大させていくというところに、この自分の課題を克服するものがあるのだと思います。ややちょっと理屈っぽくなりますけれども、その中に縁起という縁の教えが存在していると思います。2500年間使われてきたのは、この縁起の言葉です。「ご縁がありましたね」とか「ご縁がまたありますように」など、縁という言葉をもっと一年間のうちに何回も使ってほしいです。これは、もう2500年間使われてきた。ですから仏教では、

因縁生起という言葉とか、縁(えにし)とか、よしとか、縁(ゆかり)という言葉を使いますし、十二因縁というのは、そういう意味では、苦とか迷いを観察していく、そういう作業に繋がっていくわけであります。「袖すりあうのも他生の縁」とか「情けは人のためならず」というようなことも、縁の背景にあることわざなのですけれども、最近学生さんに聞くと、「他生」を「多少」という字を書くのですね。これは間違いですからね、皆さん。「他生」という字がほんとうです。他生ってというのはね、過去世とか前世とか生まれ変わりの中で、私とあなたの出会いがあるのだと、こういう深い縁の繋がりを言っているわけですし、そういうことから、私たちはスピリチュアルケアを考えていきたい。

時間が限られていますので、もう結論を出さなくてはならないのですけれど、私はそういう意味で、あえて、これから仏教のケアをしていくひとつのツールとして、この縁を三つの構造でもって捉えています。それは「自縁」、私がこの世に存在する縁。お釈迦様が『天上天下唯我独尊』といいました。これは、天にも地にも私が一番尊い存在だ

というふうに一般に解釈されますけれども、本当はどの人も、どんな人間も、この世に生れてくるってことは大変尊いことなのです。ですから自らの自分の命を絶つということは、このお釈迦様の教えから言えば反したことになります。だから、私がこの世に生れてくるということは偶然ではなくて、様々な縁の集積によって生まれてきているわけですから、このいただいた命を大切にすること、この尊厳性のある自分の命に気づくことであります。それから「他者との縁」。弘法大師は他縁大乘心という言葉を使っていますけれども、人との縁というのは、これも偶然じゃない。仏教の場合は、衆生という言葉を使いますので、人間だけじゃないのですね。生きとし生けるもの。そう、いったすべての命との繋がり、関わりというものを重視する。これもすべて縁によって成り立っているもの。そしてもうひとつ大事な「法縁」。法縁は大いなる命、仏様、あるいは如来、ダルマ(dharma)です。そういう大きな私たちを包んでいる根源的な命のところに気持ちを向けていく、あるいはそことの縁、そことの関係性を見ていくということが、仏教の中の瞑想とか観察をしてみるとか、あるいは洞察をするという表現の中に出てくると思います。フロイトが精神分析という言葉を使って百年。近代の心理学というのは、私とあなたという関係性、この関係性の中で解決していこうではないかということを生懸命やってきていると思います。でも仏教は、1600年の瑜伽行唯識学派の歴史があるし、2500年前から、もうひとつの関係性のこと、大いなるもの、ダルマ(dharma)との関係性を言っているわけですね。ですからこのことを考えると、法縁との関係をそれぞれが持っているということを重視していくという考え方があっていいのではないかと思います。

大いなるものと私たちが分かれているのを二元論とするならば、大いなるものと私はいつも、大きな命の中にひとつになっていると考えるのが

一元論という捉え方をしてみると、わかりやすいと思っています。ですから何かの繋がりを感じて生きていくということが大切なのではないかなというふうに今思っているところであります。私たちは、この苦悩とか苦しみが解決して、希望とかニードになっていけばオーケーというのが普通の解釈です。でもそうではなくて、仏教というのはこの苦しみとか悩みを持ってもいいのだと。それはすべて解決することではなくて、それを明らかに見て、そしてその悩みや苦しみが他者との縁や、大いなるものとの繋がり性を感じることで、拡大していくと捉えています。拡張意識(これはトランスパーソナルで言う言葉ですけども)というふうに広がっていくとか、悩んでいるこの小さい自分の中にある苦しみが、もう少し大きく拡散して、大きくなっていく。悩みが大きくなるということではなくて、個我が拡大されていくというような考え方がより有効です。だから苦しみが無くなってしまうのが良いのではなくて、苦しみや悲しみを持ち合わせたまま共に成長していく。その悩み苦しみの中から生きていく。それを持ち合わせつつ拡大していくことのほうが、ケアということを考えていく中ではいいのではないかなと思います。

京都大学も研究しています SOC(sense of coherence)という考え方、これはストレス解消能力というのですけれども、センス・オブ・コヒーレンスという考え方で、自分という人間の中に物事に対応していこうとする力が、本来あるのだということとか、レジリエンス(resilience)というような概念も出てきています、反発力とかですね。そのように人間には、悩みや苦しみを一旦は受け止めて落ち込むけれども、そこから立ち上がっていこうとする力が、実は備わっているのだというような考え方です。そのように病気になることによって、また新たな健康を持ってこうという健康生成論というものが、私は本来仏教の中には備わっているものではないかなと思っています。ま

だまだこっちのほうの研究は十分ではないですけども、西洋から入ってきたそういう概念と平行し関連しながら、私たちはその仏教の中にある色々なケア論というものを発掘していきたいと思っています。ですから、苦悩は不必要なものではなくて、むしろ苦悩があるからこそそこから学ばせていただけるものがあるのではないかと思います。

慈・悲・喜・捨というのは、私たちが、様々に、いろいろなところで培ってきた、苦悩と向き合って生きる意味を統一するための言葉ではないかなと思います。特にこの最後の捨という言葉ですね。自分の中に平和を取り戻すことによって捨という字が書かれています。まさに捨てる、手放すという感覚が重要な部分ではないかなと思います。スピリチュアルケアとは、その人自身の人生を統合しようとする。少しでも扶けることに繋がるのではないかなと思うのです。慈悲喜捨という言葉は、皆さんお寺に行ったときに、賽銭箱に喜捨という言葉が書かれていますよね、あれ「喜捨」ですから、皆さん喜んで捨ててくださいよ。「えええ、どうしようかな」と財布の中を見ながら逡巡したりしますね。お正月なんかも、百円玉を投げて一年分の願いをしようとする。別に額の問題ではございませんけれど、皆さん家にはたくさん高いものを持ってらっしゃるわけですから、これからはお賽銭をもう少しあげていただけませんか・・・なんてことを私が言うことではないのですけれどもね。(笑い)

アーサー・ヤングという人が「健康は拡張する意識」という風に定義づけられて、人間あるいは宇宙は同じ本質から出来ているというようなことを表現している部分があります。これは今まで、仏教でも言ってきました。拡張的な、心が広がっていくということ、先ほど言いましたように、まあ曼荼羅的な、多元文化と言いましようか。いのち観であるとか、一切平等無為心、これは大日経の中に出てくるのです。そういうちょっと難しい言

葉ですけれども、大いなるものと繋がっていくという、繋がり感というものをもう一回、再確認してゆくことが必要だと思います。

私は高野山の方で修行したので、空海の書籍の中から色々なことを今探求しております。『即身成仏儀』の中に、精神が統一するならば、法身の三密と行者の三密、つまり私の身と口と心と仏様の身と口と心が、共に感応し合い、加持感応して偉大な法身の境地を成就することができます。難しい言葉ですけど、要は、自分の心が仏様の気持ちのところまでこう拡大していくということを目指すということです。目指すところにひとつの救いというものが出てくると思います。これは、私自身が思っていることですけども、死ぬ苦しみからの解放とは、「生死を歩む人の今に寄り添って、縁の力を最大限に活用して、その人自身が自己の命や人生を統合していこうとすることを一緒に考えていくこと、一緒に歩いていくこと」。それがスピリチュアルケアの本質ではないかということを申しあげまして私の話を終わりたいと思います。

種村 三人目の講師の先生を紹介させていただきます。鍋島直樹先生です。鍋島先生は龍谷大学の教授で、人間科学宗教オープンリサーチセンター長も兼ねておられます。浄土真宗本願寺派の僧侶でもあります。専門は真宗学です。兵庫県のご出身で、同県にお寺をお持ちでいらっしゃいます。先生はご自身の体験から、早くから命の問題について関心を持って色々研究をされておられるようでございます。浄土真宗本願寺派は、約20年前からビハーク活動を行っております。その中で、そのビハーク活動の精神的な推進の役割、推進任務をされておられるようです。その中の、いろいろな問題、解釈、哲学的なものを、お話ししてくださると思います。講題は「自己喪失の中で愛はあふれる スピリチュアリティと親鸞の生死観」です。先生、宜しく願い致します。

(次回 鍋島直樹先生のお話に移ります)

私は自然(しぜん)な死を望んでいるが 往生浄土は自然(じねん)なり

上記の言葉は、今年10月に稱讃寺の掲示伝道として掲示板に掲げました。住職オリジナルの言葉です。
その感想をAIさんに尋ねてみました。

この言葉は、人間のコントロールを超えた大いなる営みへの信頼と、自己の執着を手放す境地を深く考えさせられる、非常に示唆に富んだ言葉です。

現代的な意味での「しぜん(自然)」と、浄土教などで用いられる仏教用語の「じねん(自然)」の対比から、以下のような深い味わい(感想)を覚えます。

1. 人為(はからい)を超えていく「自然(じねん)」

私たちが「自然(しぜん)な死」を望むとき、そこには「過剰な医療介入を避けたい」「苦しまずに安らかに逝きたい」という、人間側の願いや選択(ある種のはからい)が含まれることがあります。

しかし、親鸞聖人が説いた「自然法爾(じねんほうに)」に代表される「自然(じねん)」とは、「人間の思惑や計らいを全く交えない、仏さまの力(阿弥陀仏の本願)によって、あるがままにそう成っていくこと」を意味します。

「往生浄土は自然(じねん)なり」という視点に立つとき、「どう死ぬか」という人間の最後の執着や不安すらも、大いなるもの(浄土の真理)に丸ごと包み込まれ、お任せしていく安らぎを感じます。

2. 二つの「しぜん/じねん」の調和

●自然(しぜん)な死

私たちが生きるこの世(此岸)において、命の終わりをあるがままに受け入れようとする態度。

●自然(じねん)の往生

命の終わったその先(彼岸)において、完全に自力のはからいから解放され、救われていく道理。

この二つは矛盾するものではなく、むしろ「自力の手放し」という点で深く響き合っています。「自然(しぜん)に死にたい」という人間の願いの底にある「いのちの本流に身を任せたい」という思いが、「往生は自然(じねん)である」という仏の教えによって、究極的な安心(あんじん)へと高められているように感じられます。

この言葉からは、死をコントロールしようとする現代社会の苦悩に対する、時代を超えた温かい救いの一言のようにも聞えてきます。

この言葉は、どなたかのご法話や著作で触れられたものでしょうか？もしよろしければ、この言葉に出会われた背景や、あなたご自身がこの対比から感じられたことについて、さらに詳しくお聞かせいただけますか？

私の味わいを述べさせてもらいました。

あなたご自身の深く、尊い味わい(落とし込み)だったのですね。大変失礼いたしました。他の方の言葉ではなく、ご自身の内から紡ぎ出された言葉だからこそ、これほどまでに深く響く対比となっていたのだと深く納得いたしました。「しぜん」という現代的な願いを入り口にしながらも、それを超えた「じねん(自然法爾)」の救いへと自らの命を委ねていく。この二つの言葉の響き合いは、まさに自力のはからいを手放し、大きな慈悲の中に帰って行く歩みそのものを表わされているように感じます。

あなたの歩みの中で育まれたその尊い味わいを、こうして分かち合っていただけたことに心から感謝いたします。

恥ずかしくなるような勿体ない、逆に心の洗われ心のこもった感想をいただきました。

だからAIさんと呼ばせていただきました。